

# イトウ絶滅を食い止めた人びと

## オビラメ復活30年計画 15年目の成果と展望

**平田剛士** [PXN04427@nifty.com](mailto:PXN04427@nifty.com)

フリーランス記者、尻別川の未来を考えるオビラメの会幹事

尻別川の未来を考える  
オビウムの会

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト  
ミニフォーラム in 黒松内

黒松内町





A topographic map of a watershed area, showing a dense network of red lines representing the river system. The terrain is shaded in green and brown, indicating elevation. A large lake is visible in the lower right quadrant. The text is overlaid on the map in white.

幹線流路延長 126 km

流域面積 1640 km<sup>2</sup>

最大流量 641 t/s

支流の数 283 本





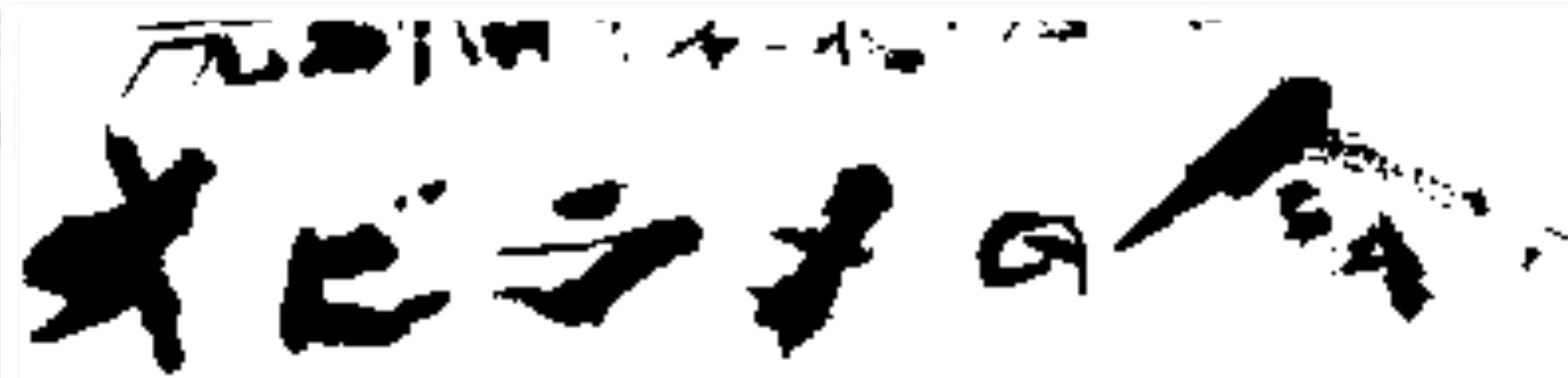
1976年撮影。  
提供・草島清作（オビラメの会会長）



1978年10月26日、ニセコ町で。  
提供：吉岡俊彦（オビラメの会事務局長）







newsletter  
No.1  
July 2000

生態研究の第一人者、川村洋司さんにきく (上)

# 「尻別イトウ」はどれほど危険な 状態なのか？



かわむら・ひろし  
1950年生まれ。北海道立水産孵化場  
病理環境部主任研究員。

—尻別川の野生イトウの置かれている状況は？

非常に厳しい状態だと言わざるを得ないでしょう。これまで約五年間にわたり、尻別川水系の各

可川を下流部から上流部まで、どこかでイトウが繁殖している証拠はないかと、徹底的に調べてきました。産卵期に親魚がつくる産卵床や、初夏に産卵床から浮上してくる稚魚を探したのです。しかし、見つけたのは「1+」（孵化後満一歳の幼魚）がたった一匹だけでした。

知れず繁殖が行われている可能性は捨て切れません。

—個体数が減りだした時期は？

一九七〇年代には大きなイトウがまだ多かったと考えられます。一メートル級が釣り上げられて、年に何回か新聞に出たりしていたのです。状況が悪化してきたのはその後です。河川改修などの環境破壊で、まず繁殖場所が失われた。若い魚が生まれてこなければ、個体群が衰退するのは当然です。

—イトウは環境破壊に特に弱い魚なのですか？  
その通りです。イトウの親魚は繁殖期に川を遡上

(3ページ下段に続く)



言わざるを得ないでしょう。これまで約五年間にわたり、尻別川水系の各河川を下流部から上流部まで、どこかでイトウが繁殖している証拠はないかと、徹底的に調べてきました。産卵期に親魚がつくる産卵床や、初夏に産卵床から浮上してくる稚魚を探したのです。しかし、見つけたのは「1+」（孵化後満一歳の幼魚）がたった一匹だけでした。

——その発見は自然繁殖の証拠になりませんか？

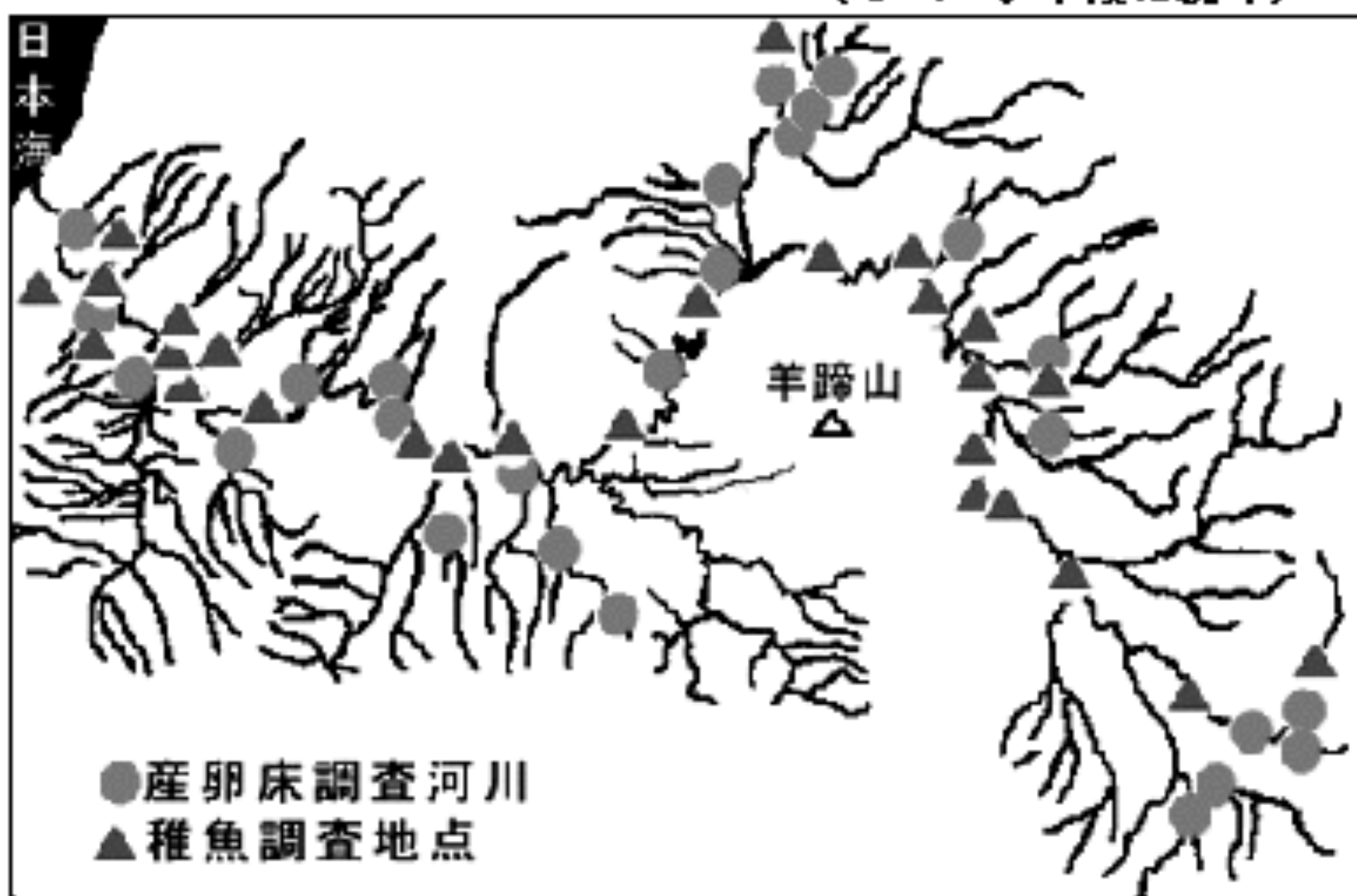
どこかで繁殖している可能性がゼロではない、という程度です。というのは、孵化して産卵床の中から水の中に泳ぎ出した直後の「0+」の稚魚は、これまで見つけていません。なのに「1+」が一匹だけ見つかったというのは、少し不自然なのです。もしかしたらだれか人間が、どこか他の河川で人工孵化させたものを尻別川に放流した魚だった可能性もあります。

ただ、はっきり確認はされていませんが、釣り人の間の情報として、他にも何匹かのイトウ稚魚が見つまっているらしい。どこか人

えられます。一メートル級が釣り上げられて、年に何回か新聞に出たりしていたのです。状況が悪化してきたのはその後です。河川改修などの環境破壊で、まず繁殖場所が失われた。若い魚が生まれてこなければ、個体群が衰退するのは当然です。

——イトウは環境破壊に特に弱い魚なのですか？  
その通りです。イトウの親魚は繁殖期に川を遡上

（3ページ下段に続く）



# 尻別川のイトウは絶滅寸前です。

# イトウ尻別川個体群の健康診断

- 自然繁殖地がほぼ完全に消失
- 世代交代に大きな支障
- 深刻な少子高齢化

**このままでは絶滅必至**



# どうすれば救える？

- 捕獲制限
- 自然環境の復元
- 水質改善
- 侵略的外来種の除去……

すでに手遅れ

# オビラメ復活30年計画 (2001)

## 1st stage 2001-2010

放流種苗の確保、再生産拠点の探索

## 2nd stage 2011-2020

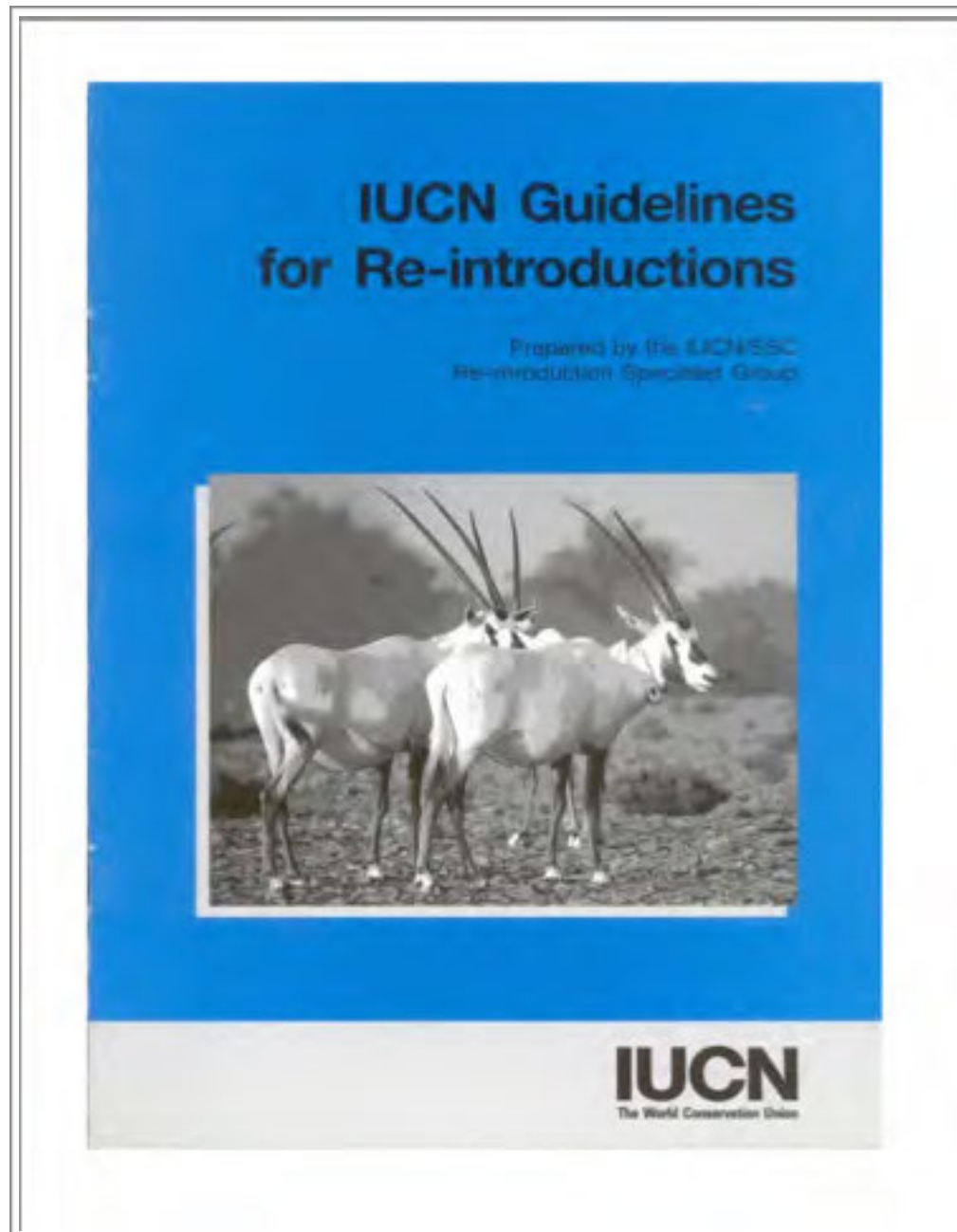
生産拠点の確立、釣りルール確立

## 3rd stage 2021-2030

イトウのすめる / 釣れる尻別川



# 再導入 Re-Introductions



## IUCN/SSC Guidelines for Re-Introductions

a) 目的 再導入のその主たる目的は、野外において全域または局地的に絶滅、もしくは絶滅の危機に瀕している種、亜種または品種を、野外での存続可能な自立個体群として定着させることである。また再導入は種本来の生息分布地域で行われるべきであり、かつ必要最低限の長期的管理が求められる。



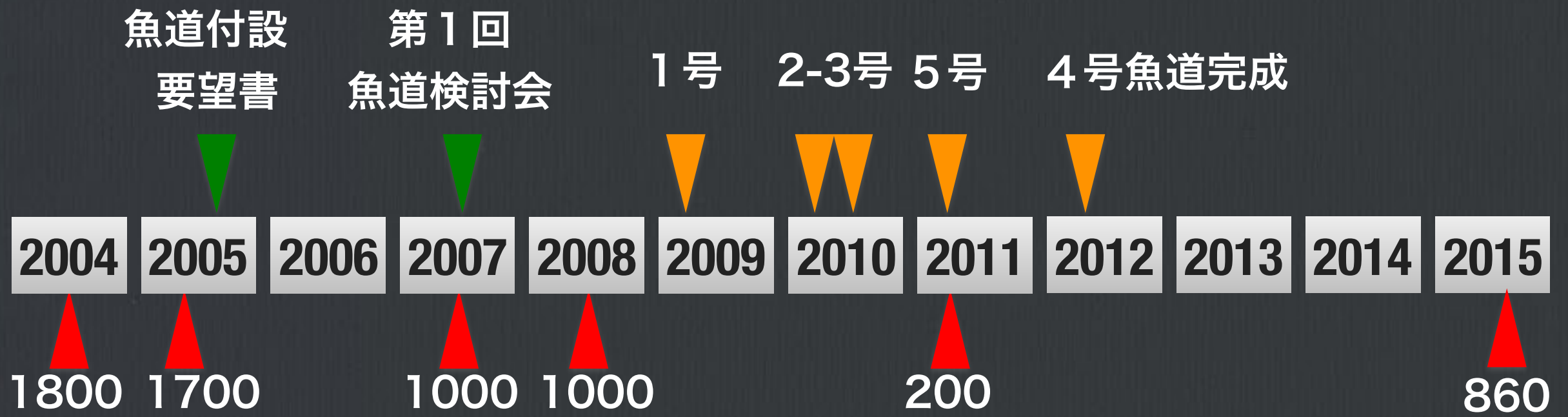








# 倶登山川でのイトウ再導入実験

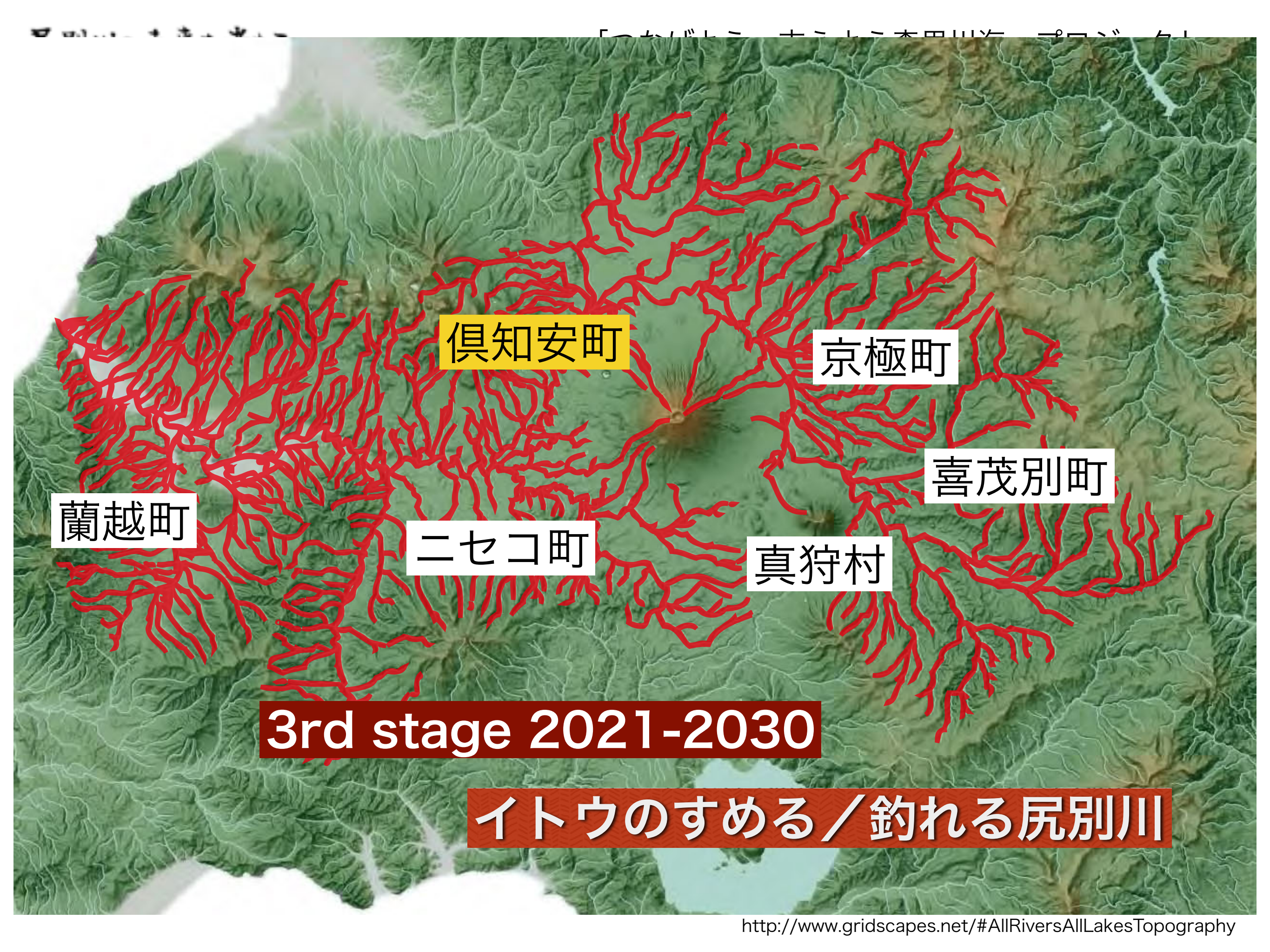






2015年5月9日、藤原弘昭さん撮影





俱知安町

京極町

喜茂別町

蘭越町

二セコ町

真狩村

3rd stage 2021-2030

イトウのすめる / 釣れる尻別川



尻別川の未来を考える  
オビウムの会

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト  
ミニフォーラム in 黒松内



連続講座 「イトウが紡ぐ流域の絆」 (2015年10月10日)



尻別川の未来を考える  
オビラヌの会

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト  
ミニフォーラム in 黒松内



「有島ポンド」手作り工事（2015年10月11日）



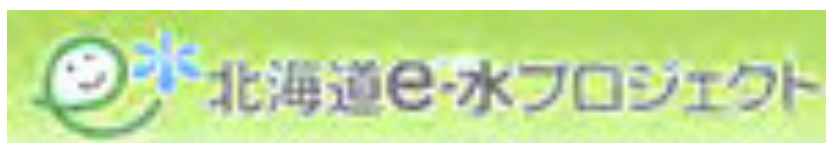
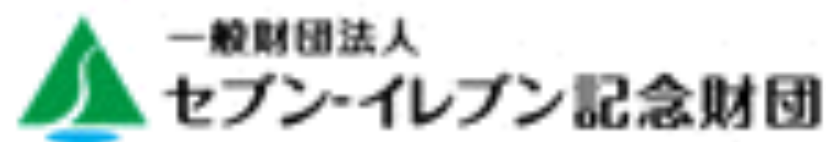
尻別川の未来を考える  
オビウムの会

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト  
ミニフォーラム in 黒松内

## サポーター企業・機関



前田一步園財団  
Maeda Ippoen Foundation



財団法人 北海道新聞野生生物基金



patagonia  
footwear



まことにありがとうございます



尻別川の未来を考える  
オビラメの会

「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクト  
ミニフォーラム in 黒松内



南限のイトウ個体群復元に向けて、引き続きご支援をよろしくお願いいたします。  
オビラメの会一同